

Title	二〇一〇年度エン・ゲヴ遺跡(イスラエル)における発掘調査
Sub Title	Excavations at Tel 'En Gev, Israel, 2010 : a preliminary report
Author	杉本, 智俊(Sugimoto, David Tomotoshi) 間舎, 裕生(Kansha, Hiroo)
Publisher	三田史学会
Publication year	2011
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.80, No.1 (2011. 3) ,p.71- 89
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20110300-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

二〇一〇年度エン・ゲヴ遺跡（イスラエル）における発掘調査

杉本智俊
間舎裕生

1. はじめに

慶應義塾大学イスラエル考古学調査団（団長 杉本智俊）は、二〇一〇年八月二日から二五日まで、イスラエル国エン・ゲヴ遺跡において考古学的発掘調査を行った。本報告は、慶應義塾大学次世代プロジェクト推進プログラムによる成果の一部である。

エン・ゲヴ遺跡は、イスラエル国北部のガリラヤ湖東岸に位置するテル状の遺跡である。⁽¹⁾これまで一九六一年にB・マザールらが、一九九〇年から二〇〇四年まで日本の複数の大学による合同調査隊が発掘調査を行い、テルの周囲を走るケースメート式市壁や列柱式建物などの遺構が検出されている。⁽²⁾しかし、これらの調査では都市

の構造や範囲は解明されておらず、宮殿や神殿、市門など遺跡の性格を顕著に示す遺構もまだ出土していない。また、それぞれの調査によって導き出された層位の対応関係は不明瞭であり、エン・ゲヴ遺跡全体の編年はいまだ確立されていない。

こうしたことから、慶應義塾大学イスラエル考古学調査団は、各時代の遺跡の構造を解明することを目的として二〇〇九年度から新たに発掘調査を行なっている（Suginoto 2010；杉本・間舎 二〇一〇参照⁽³⁾）。調査区は、上の町と下の町の境界にあたると思われるスロープ上（G地区）とテル上で最も標高の高い地点（H地区）の二地区に設定されている。今年度の調査では、これらの調査面積を拡大し、層位ごとの遺構の構造の解明

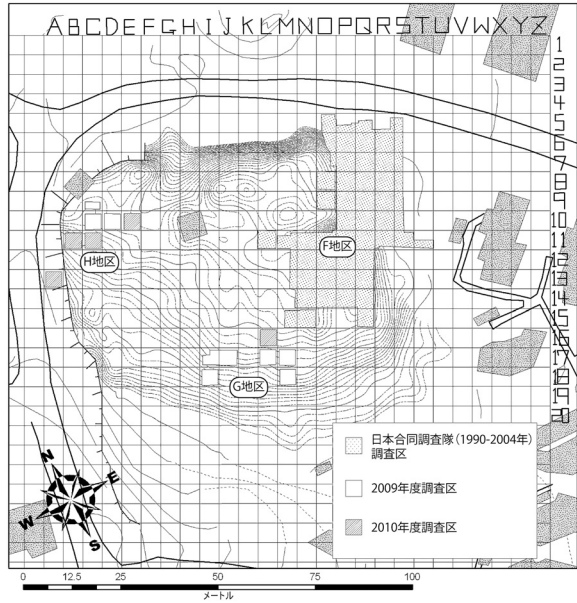


図1 2010年度エン・ゲヴ
遺跡発掘調査区

を試みた(図1)。

今年度の調査団の構成は、

団長・杉本智俊(慶應義塾大学文学部)

スーパードクター・高井啓介(慶應義塾大学言語

文化研究所)、藤山龍造(慶應義塾大学)、平川敬

治(福岡市教育委員会)、イド・ヴァクテル(ヘ

ブル大学考古学研究所修士課程)

レジストラ・間倉裕生(慶應義塾大学文学研究科

後期博士課程)

遺構実測・渡部展也(中部大学)

遺物実測・牧野久実(鎌倉女子大学)

マネージャー・岡田真弓(慶應義塾大学文学研究科

後期博士課程)

であり、この他に地理班として渡部展也(兼任)、文献

史学班として高井啓介(兼任)、パブリック考古学班と

して岡田真弓(兼任)がそれぞれの調査活動を行った。

またイド・ヴァクテルはイスラエル側リエゾンも行った。

この他に慶應義塾大学や中部大学の学生、ヘブル大

学関係者がヴォランティアとして、ドゥルーズ族の労働

者が発掘作業補助員として参加した。

2. G地区

昨年度の調査では、L/M17から厚さ約一五〇センチの壁(W105+W123)が出土した。三段に組まれた石の基礎の上に両側面が漆喰で塗られたテラ・ピゼの上部構造をもつものである。この壁は東西方向に走っており、一九九〇年から二〇〇四年の日本隊の調査によってテル東端に確認されたケースメート式市壁と直交する可能性が考えられた。もしそうなら、W105+W123の北側または南側に同様の壁が平行に存在したはずであるが、昨年度の調査ではもう一つの壁は確認できていない。このため、今年度はL16に五メートル四方の調査区を設定し、W105+W123の北側にもう一つの壁が存在する可能性を確認した。ここから壁が出土すれば、南北の壁の間及び外側には壁建設時の床面が残っていることが想定され、以前の日本合同調査隊の調査で解明できなかったケースメート式市壁の建造年代が明らかにされることも期待された。

調査の結果、L16南端及びL/M16の間の畔の地表下約五〇センチにおいて、レンガ質の土が東西方向に一列

に続くような状況が認められた。標高は昨年のW105+W123とほぼ同じ(マイナス二〇・〇〇メートル)であったので、ケースメート式市壁の北側の壁である可能性を考え、この部分(W165)を残し、北側部分(L164)をさらに掘り下げた。踏み固められた床(L169)が出土したが、標高はマイナス二〇・二〇メートルであり、昨年度壁の南側で出土した床(L117+L122+L152)よりも四〇センチほど高いので同一のものではないと考えられた。遺物は非常に少ないものの、鉄器時代終盤からヘレニズム時代に当たると思われる。このため、L169を掘り抜いて調査を進めたが、L117+L122+L152と同じ標高に達してもW165に接する床は確認できなかった。ただ標高二〇・二五メートルの深さで崩れたレンガが堆積したもの(L168)が検出されたため、その下場に床があった可能性はある。

残した部分に関しては、その構造を明らかにするため、W165の東側に幅五〇センチの試掘溝を設けて調査を行った。壁の上部構造と思われたものは、L168同様、崩れたレンガが堆積していたものであり、L16に壁は存在しなかったことが確認された。畔に残された断面から判断すると、これらのレンガはW105+W123から崩落



図 2-a 南側から見た W105 及び L16

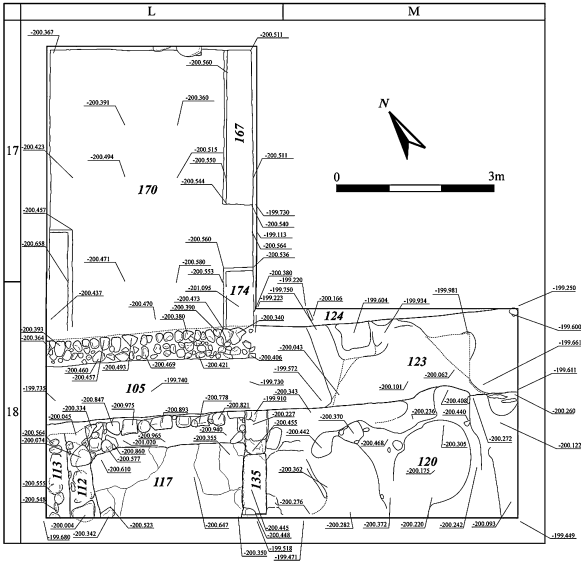


図 2-b G 地区のプラン

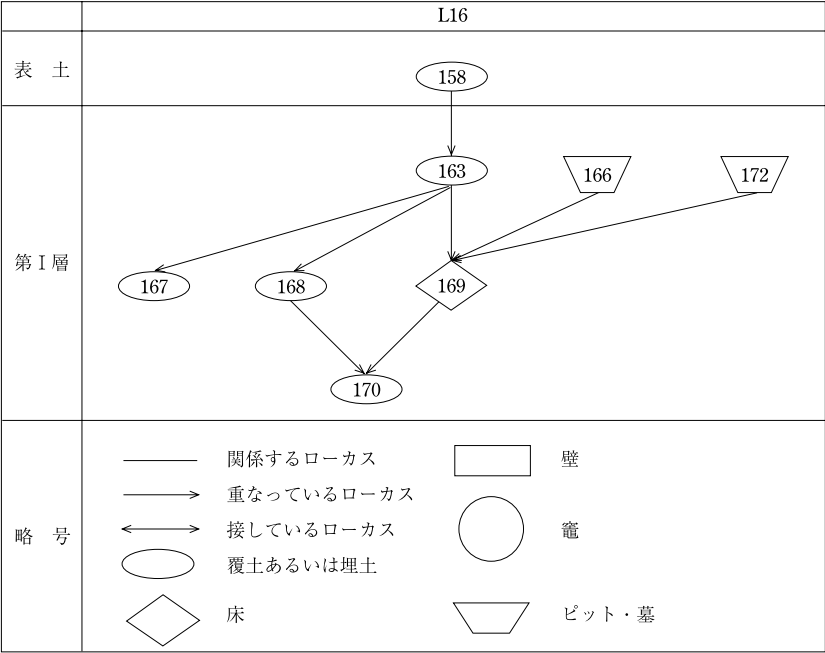


表1. G 地区の層位概念図

したものようである（図2-a、b、表1）。

次に焦点を当てたのは、L17とM17の間の畔である。昨年度の調査では、L17からこの畔に入り込む南北に並んだ切石の列（W135）が検出されていた。W135はW105に直交しているため、L17とM17の間の畔を検証することでW105とW135の関係を明らかにすることができると考えられた。

畔を掘り抜いてW135まで到達した結果、この切石の列は幅約四〇センチ、長さ約一二〇センチの矩形に整形された石からなることが判明した。W135はW105のテラ・ピゼの上部構造の下に入り込んでおり、両側には漆喰の床L117とL122が接している。このことから、W135はW105やL117やL122と同時期もしくはより以前に造られたと考えられるが、現時点ではこれらがどのような構造の建物であったのかを復元することはできない。

3. H 地区

昨年度H地区では、C9、C10、D10の三つの

グリッドで調査がなされ、第Ⅰ層（初期ローマー・ヘレニズム時代）、第Ⅱ層（ヘレニズム・ペルシア時代）、第Ⅲ層（漆喰の床、鉄器時代Ⅱ期）、第Ⅳ層（竈と矩形の壁、鉄器時代Ⅰ～ⅡA期）の四つの層が確認された（表2）。

昨年度の報告に関しては、杉本・間舎 二〇一〇 表3（³参照）。しかし、第Ⅲ層の漆喰の床に接する建物は確認されておらず、第Ⅳ層に達したのはD10の東半分のみで、竈や壁に接する床にも到達できなかった。したがって、今年度は①調査区をB1'、C1'、E10に拡大し、漆喰の床に接する建物を確認すること、②D10およびC10をさらに調査し、第Ⅳ層の遺構の構造を明らかにすること、③すでにマザールらによって発掘されたA13を再調査・図化し、テルの傾斜部とこれらの遺構の関係を解明すること、の三点を目的として同地区の調査を行った。

a. 第Ⅰ～Ⅱ層

昨年度調査を行ったC10'、D10では、地表から第Ⅰ層まで約一五センチ現代の攪乱が入っていたが、今年度新たに設定したC11'、E10ではそれがさらにひどく、場所によっては二メートル近い深さにまで達していた。⁽⁴⁾このため、第Ⅰ層と第Ⅱ層を確認することはできなかった。

b. 第Ⅲa層

H地区東側に広がった漆喰の床は、昨年度は層位が不明確であったが、今年度は時代の異なる二つの層（第Ⅲa層、第Ⅲb層）に分けられることが明らかとなった。

上層の床はC11 S L614'、L621'、L622'、E10 S L617に認められた。C11で検出された床は後代の墓や掘り込みによって分断されているものの、標高がほぼ同じであり、元来は一つの床としてグリッドの全面に広がっていたと考えられる。E10はかなり深い場所まで攪乱されており、⁽⁵⁾床（L617）はグリッドの北東端でわずかに確認できたのみである。しかし、L617の直下からは一五センチ程の厚さの硬質の土の層が検出されており、漆喰の床の基礎として人為的に盛られたものと思われる。これら上層の床の標高はいずれもマイナス二〇〇・二〇メートル前後であり、昨年度C10'、D10で検出された床L543'、L547'とはほぼ等しい。したがって、この漆喰の床は昨年度あきらかにされたものより広範囲に広がっていたと考えることができる。

攪乱の影響の少ない昨年度出土した土器⁽⁶⁾によると、この床の年代は鉄器時代ⅡB期（紀元前八世紀頃）と考えられる。マザールの調査で並行する土器の出土する層

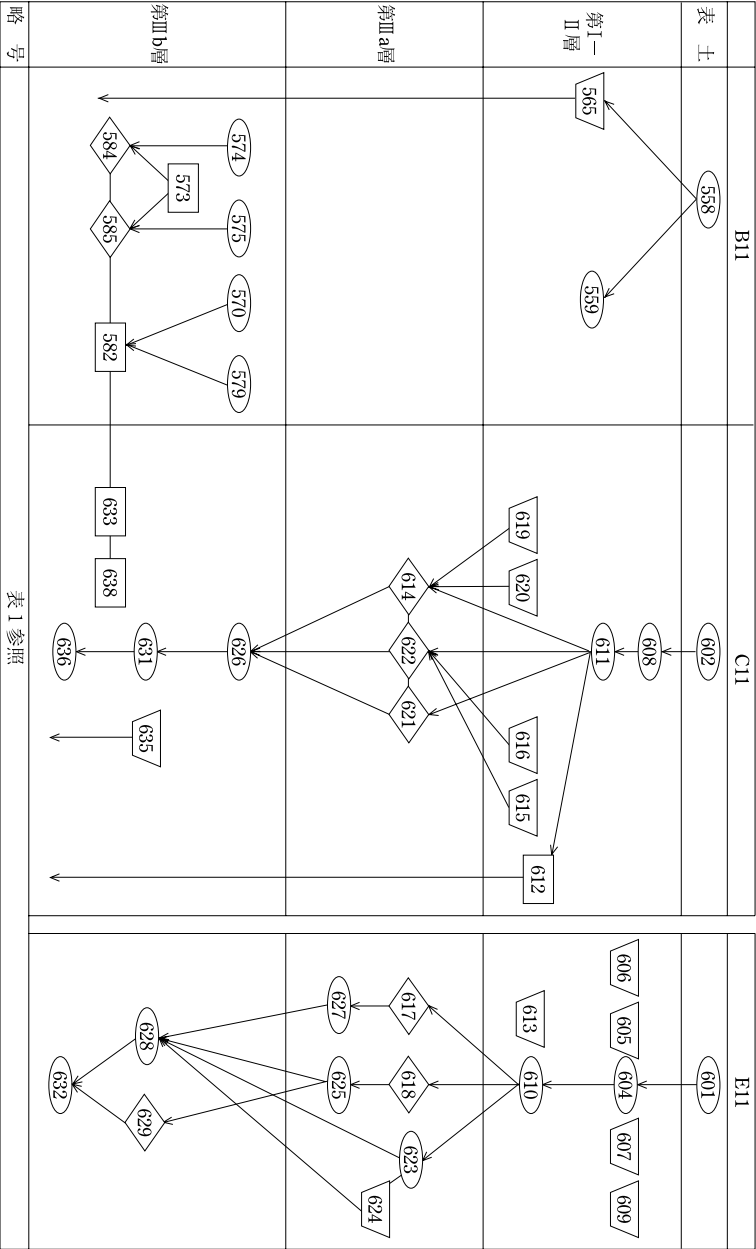


表2. H地区B11、C11、E10の層位概念図

(第Ⅱ層)からは、アラム語銘文の記された土器が出土しており、今後当遺跡の歴史復元を考える上で基礎となるであろう。

C11の南東端には、L621と接する石の壁(W612)が出土している。この壁は北東から南西へ走っており、東面と南面の畔に入り込んでゐる。厚さは石二列分と小規模であり、漆喰の床とは関係がなさそうである。むしろ後代に掘り込まれて造られたと考えるべきであろう。

c. 第Ⅲb層

下層の漆喰の床は、E10の西側L629で検出された(図3)が、C11にはなかったようである。この床も、上層同様攪乱のため破壊を受けているが、畔の断面から元来E10全面に広まっていたことが確認できた。⁽⁷⁾

C11では、漆喰の床とほぼ同じレベルで東西方向の大きな壁(W633)が検出された(図4)。これは約四〇センチの大きさの石によって造られた幅約一二〇センチの大規模なものである。W633と同一と考えられる壁はC11の西隣のB11にも継続していた(図5a、b)⁽⁸⁾。グリッド北側のW582がそれである。B11はテルの西側斜面に位置しており、花壇用の水道管を設置する際に上面が

破壊されているが、壁の基礎部は確認できた。W582の南側では、壁と接する石敷き(L584+L585)が検出された。石敷きを構成する石の大きさは約四〇センチである。西側は部分的に沈んでおり平坦でないが、おそらく基礎の土が流れてしまったためと考えられる。この石敷きの直上には南北方向の小さな壁(W573)があり、W582と交差する。したがって、石敷きが使用されていた時期は更に二つに分けられるであろう。

この東西方向の大きな壁と石敷きは、一九六一年のB・マザールらの調査においてB地区第Ⅲ*層から出土した「要塞」(Mazar *et al.* 1964: 19)と同様の構造のものと思われる。マザールらのB地区を本調査隊の調査区に当てはめるとA13になり、本年度はこの調査区でも清掃、記録、図化作業を行った(図6)⁽⁹⁾。両調査で出土した壁を比較すると、これら東西の壁は平行に走っており、石敷きの標高もほぼ同じである(マイナス二〇・〇メートル)。これらは一つの大きな建物を形成していた可能性が考えられる。さらに、C11西面の畔の中には、畔と並行の南北方向へ伸びる壁(W638)の存在も確認されている(図7)。この壁はW633と直交しており、A13で知られる二つの平行した壁(W639、W640)⁽¹⁰⁾



図3 E10 IIIb 層の漆喰の床（左側）



図4 南側から見たC11 第 IIIb 層



図 5-a 東側から見た B11

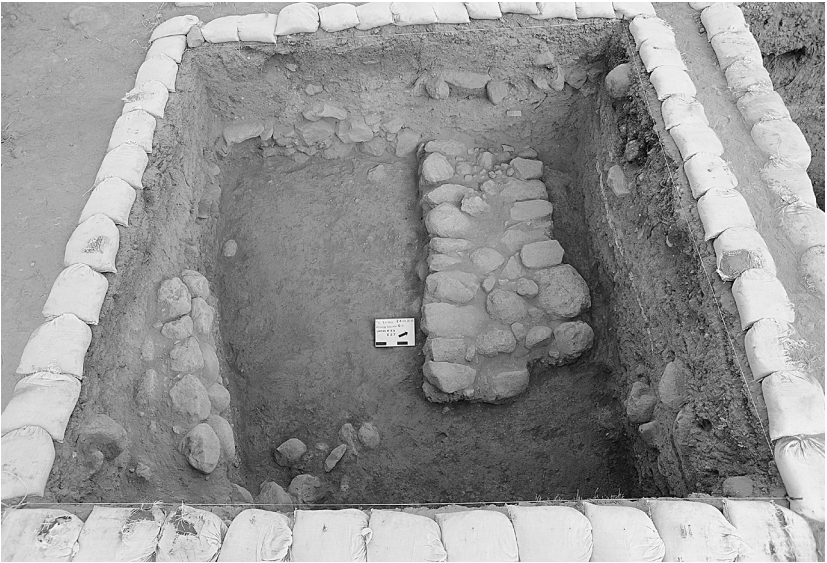


図 5-b 東側から見た C11



図6 西側から見たA13



図7 C11 W633 と W638

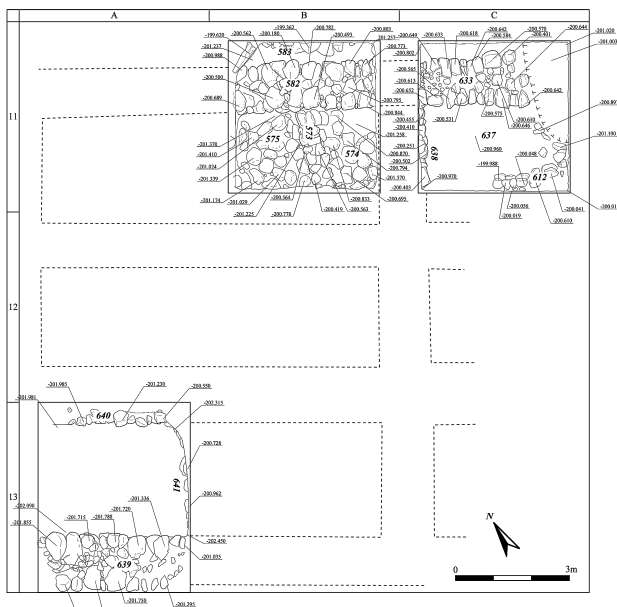


図 8 H 地区西側の
大型建物

と共に並列した矩形の部屋を構成していたものと思われる（図 8 参照）。これらの部屋の内側は土盛りの基礎の上に石敷きが設置されていた。

この構造は、テル東部で検出されているケースメート式市壁ともよく似ている。しかし、もしこれが市壁なら、ケースメートの長辺は一〇メートルほどになり、このように大きな部屋が単なるテルの擁壁として機能していたと考えるには無理がある。W638 は北側に継続していないように見え、上質な石敷きがあることも考慮すると、これらの部屋は独立した大型建物の一部であった可能性もある。

この建築が使用された年代を正確に判断できる遺物は、現代の攪乱を受けているために出土していない。しかし、A13 の遺構はマザールらの第Ⅲ*層にあたるので、一応前九世紀の遺構と考えられるであろう。

d. 第Ⅳ層

昨年度の調査では、D10 の東側部分で、下層の漆喰の床よりさらに下層から竈を伴う遺構が検出された。この遺構は、炭素一四分析によって前十世紀前半の年代が与えられており、聖書の記述との関連からゲシュル人の都

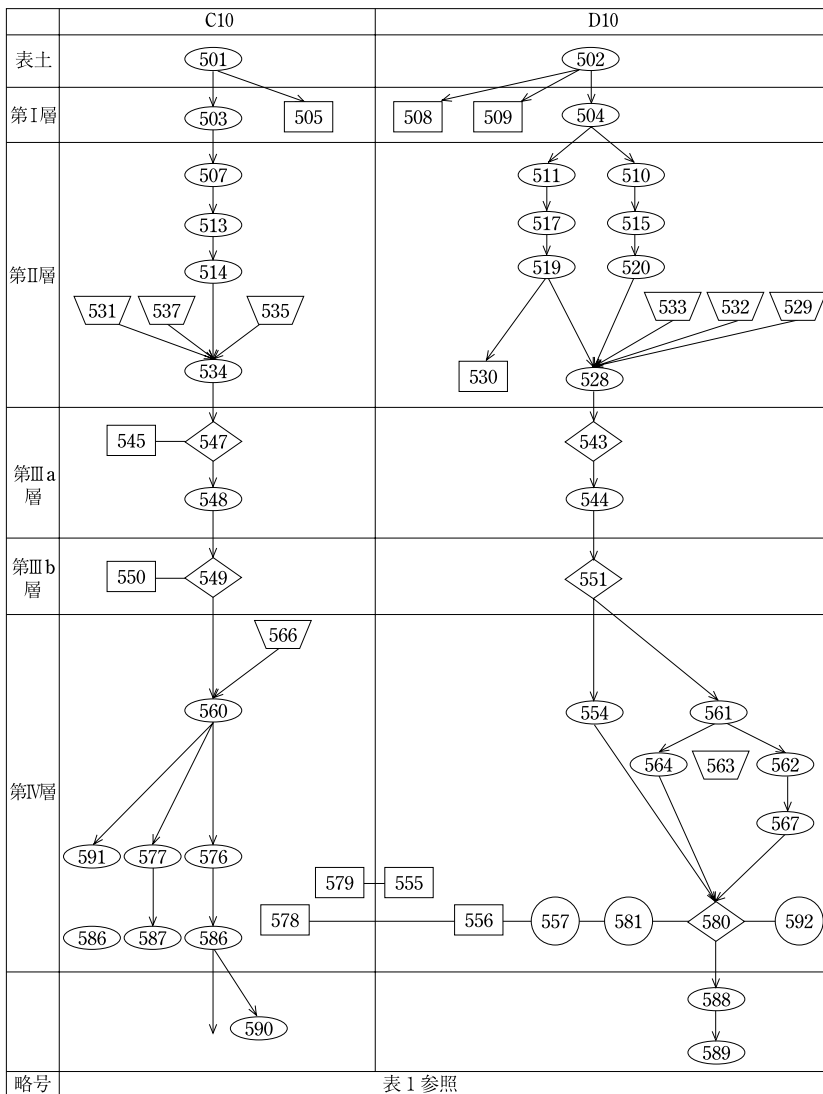


表 3. H 地区 C10、D10 の層位概念

市のものである可能性が考えられる。

本年度は、この遺構の性格をさらに解明するため、D10およびC10を掘り下げた。D10では、炭化物を多く含む赤黒い土 (L564) の下から床 (L580) が検出された。この床には、昨年度出土した竈 (L557) の他に形の異なる二つの竈 (L581、L592) が据えられていた。

また、床の上から厚さ三〇センチほどにわたって復元可能な土器が大量に原位置で出土した (図9)。L580からは、この他に滑石製の大きな印章が一点出土している。

設備の規模や遺物の多様性を考え合わせると、昨年度想定したとおり、L580が一般の住居ではなく、大型建物の一部であった可能性が高いであろう。また、竈や土器、炭化物などが集中して出土したことから、L580は調理と関係する空間の一部であったと考えられる (図10-a、b)。

昨年度出土した竈を囲う二つの壁 (W555、W556) では下場の標高が異なり懸案となっていたが、床 L580はW556と接していることがわかった。しかし、W555とW556の関係、W555とL580の関係は依然不明確である。C10では、下層の漆喰の床の下から矩形の壁 (W578、W579) が検出された。この壁で囲まれた部分からも、



図9 新たに検出された竈と土器 (D11)



図 10-a D11 第Ⅳ層
(オルソ補正後)

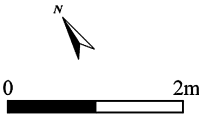
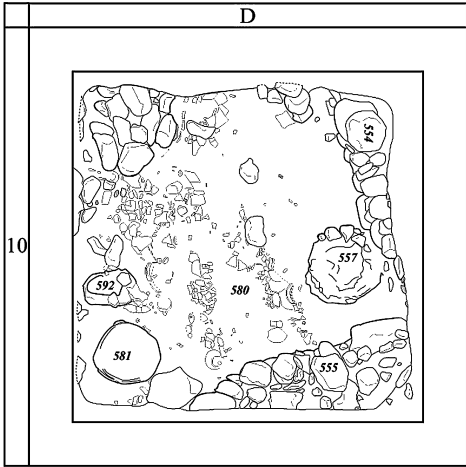


図 10-b D11 第Ⅳ層

D10 同様に炭化物を含む土 (L577) が見られたが、壁に接する床を確認することはできなかった。ただ、炭化した植物遺体が大量に検出された標高はマイナス二〇一・〇〇メートル前後に集中しており、そこに床があった可能性も否定できない(図11-a)。C10 北側の壁(W578)はD10 東側の壁(W556)とほぼ同じレベルで直交しており、竈を伴う床とともに一つの建物を構成していた可能性が高い。

C10 北西端(L590)及びD10 北東端(L586)では、第IV層よりも下の状況を確認するため、試掘溝を設けて掘り下げた。C10では標高マイナス二〇二・三五メートル、D10では標高マイナス二〇一・五五メートルまで確認したが、それぞれ第IV層の下で岩盤直上の自然堆積と思われる層に到達した(図11-b)。したがって、エン・ゲヴの上の町には鉄器時代I期以前の居住は存在しなかったと言えるであろう。

4. まとめ

今年度の調査結果をまとめると、以下のようになる。

(1) G地区のL16に壁は存在しないことが確認された。したがって、W105はケースメート式市壁の

一部でない可能性が高くなったと言えるであろう。その場合、このように厚い壁は何のためのものなのか検討する必要がある。特にその南側には切石や漆喰の床があり、特異な建物がこの地点に存在した可能性も考えられる。

(2) H地区北側では、鉄器時代の層から明確に二つの時期に分けられる漆喰の床が確認された。これらは本遺跡の層位を考える上で重要な指針となる。

(3) テルの西側斜面では、前九世紀頃の平行する東西方向の三本の壁、南北方向の壁とその間の石敷きによって構成された大型建物が存在することが明らかとなった。これは、すでにテルの東側で検出されているケースメート式市壁に対応するものかもしれないが、もしそうなら、これまでイスラエルから発見されたことがないほど大規模なものだったことになる。この建物の機能は、さらに慎重に検討する必要がある。

(4) C10、D10では、前十一〜十世紀と考えられる三基の竈を伴う「調理場」らしい遺構が検出された。出土状況は極めて良好で、大量の土器や炭化物が原位置で検出された。ゲシュル王国の物質文化や



図 11-a C10 炭化物が検出された地層



図 11-b C10 掘り終わりの状況

この地方の土器年代を考える上で貴重な資料となると思われる。

- (5) エン・ゲヴの上の町には、鉄器時代Ⅰ期以前の居住は存在しないことが確認された。

以上の成果に基づき、来年度は①層位の関係をより正確に把握すること、②すでに明らかになりつつある第Ⅲb層の大型建物や第Ⅳ層の遺構の全体像を解明すること、を目的として、さらに調査範囲を広げて発掘を行う予定である。

参考文献

- Mazar, B., Biran, A., Dothan, M. and Dunayevski, I. 1961
“Ein Gev Excavations 1961,” *Israel Exploration Journal* 14, 1-33.
- Sugimoto, D. T. 2010 “Tel ‘En Gev : Preliminary Report,” *Hadashot Arkheologiyot* 122
- 杉本智俊 二〇一〇 「古代イスラエルとその近隣諸国—二〇〇九年度エン・ゲヴ遺跡発掘調査報告—」『第十七回西アジア発掘調査報告会報告集』一〇一—一〇六頁
- 杉本智俊・間舎裕生 二〇一〇 「二〇〇九年度エン・ゲヴ遺跡(イスラエル)における発掘調査」、『史学』七九卷、八七一—一四頁。

月本昭男他(編) 二〇〇九 『エン・ゲヴ遺跡——発掘成果報告 一九九八—二〇〇四』リトン。

註

- (1) エン・ゲヴ遺跡の概要については、杉本・間舎(二〇一〇)を参照。
- (2) 詳しい調査結果については、それぞれの報告書(Mazar et al 1964; 月本他 二〇〇九; Sugimoto 2010; 杉本・間舎 二〇一〇)参照。
- (3) 最終的な層位はまだ確定されていないので、本報告の層位の名称はあくまで暫定的なものである。昨年度第Ⅲa層とされていたピット群は、より正確には第Ⅱ層とすべきだと考えられる。
- (4) 昨年度同様、第Ⅱ層では土層が何重にも重なっていた。しかし、明確な遺構はなく、どの層にもヘレニズム、ペルシア、鉄器時代の土器が混在していたので、これ以上層位を細分することはできなかった。この層は、おそらくペルシア時代からヘレニズム時代までのかなり長い期間の堆積によるものと思われる。
- (5) 上層の遺構の残存状況から、これらすべてが同一の攪乱による破壊でない可能性もある。
- (6) 特に広口壺の並行例に注意されたい。
- (7) L630の標高がマイナス二〇・五〇メートルであるのに対してL629の標高はマイナス二〇・四〇メートルであり、両者は異なる段階の床である可能性も完全に排除することはできない。しかし、本遺跡は全体的にスライドしており、床が水平でなかったり、壁が大きく歪

んだ状態で出土することがしばしば確認されており、そのためかもしれない。地震等の影響も考えられる。

(8) B11ではこの直上まで攪乱の影響を受けている。

(9) この調査区はマザールらの調査の後、日本の合同調査隊も調査を行っているが、未報告であるため、再調査を行った。

(10) マザールらの調査で出土したこれらの壁にはローカス番号が付されていないため、本調査時に新たに付した。同様に石敷きにも 1641 というローカス番号を付した。

(11) この印章については別の形で報告することが予定されている。このローカスからは、他にもビーズや金属製品の断片、フリント等が出土している。

(12) D10「調理場」(1580)の上場の標高がマイナス二〇一・〇三メートル、下場がマイナス二〇一・三八メートルであり、そこから今年度検出された二基のタブンの標高もそれぞれマイナス二〇一・〇四メートル、マイナス二〇一・〇五メートルなので、この炭化物の標高とはほぼ対応する。